

東日本大震災津波復興特別委員会会議記録

東日本大震災津波復興特別委員会委員長 岩崎 友一

1 日時

令和7年8月7日（木曜日）

午前10時2分開会、午前11時31分散会

2 場所

特別委員会室

3 出席委員

岩崎友一委員長、柳村一副委員長、佐々木順一委員、関根敏伸委員、五日市王委員、高橋はじめ委員、小西和子委員、郷右近浩委員、軽石義則委員、名須川晋委員、岩渕誠委員、菅野ひろのり委員、千葉秀幸委員、大久保隆規委員、畠山茂委員、千葉伝委員、佐々木茂光委員、城内愛彦委員、神崎浩之委員、川村伸浩委員、福井せいじ委員、臼澤勉委員、佐々木宣和委員、高橋穂至委員、高橋こうすけ委員、はぎの幸弘委員、鈴木あきこ委員、松本雄士委員、村上秀紀委員、菅原亮太委員、中平均委員、高橋但馬委員、吉田敬子委員、佐々木朋和委員、千葉盛委員、飯澤匡委員、佐々木努委員、ハクセル美穂子委員、工藤剛委員、村上貢一委員、斉藤信委員、高田一郎委員、木村幸弘委員、小林正信委員、田中辰也委員

4 欠席委員

佐藤ケイ子委員、上原康樹委員

5 事務局職員

藤原事務局次長、柳原議事調査課総括課長、嵯峨政策調査課長、加藤主任主査、門脇主任主査、久保田主査、谷地主査、八幡主事

6 説明のために出席した者

なし

7 一般傍聴者

なし

8 会議に付した事件

(1) 過疎先進地・沿岸で考える 人口減少時代の地域のありかた

(参考人)

フリーライター 手塚 さや香 氏

(2) 現地調査実施報告書（5月実施分）について

(3) その他

9 議事の内容

○岩崎友一委員長 ただいまから東日本大震災津波復興特別委員会を開会いたします。

上原康樹委員は欠席とのことですので、御了承願います。

これより本日の会議を開きます。

本日は、配付いたしております日程により会議を行います。

初めに、日程1、過疎先進地・沿岸で考える人口減少時代の地域のあり方について調査を行います。

本日は、講師としてフリーライターの手塚さや香様をお招きしておりますので、御紹介いたします。

手塚様の御略歴につきましては、配付いたしております資料のとおりであります。手塚様は埼玉県さいたま市の御出身で、毎日新聞記者や釜石市の釜援隊での復興支援活動を経て、現在は釜石市を拠点に取材ライター、キャリアコンサルタント等の活動をされておられるほか、釜石市移住コーディネーターや岩手県総合計画審議会委員等も務められております。

手塚様には、御多忙のところお引き受けいただきまして、改めて感謝を申し上げます。

これからお話をいただくことといたしますが、後ほど質疑、意見交換の時間を設けておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、手塚様、よろしくお願いいたします。

○手塚さや香参考人 先ほど御紹介いただきました手塚さや香と申します。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

初めてお目にかかる方はあまり気にならないと思うのですが、私3週間ぐらい前に喉を壊しまして、少し声が出にくくなっております。お聞き苦しくて大変申しわけありません。途中二、三カ所で1分ぐらい休む時間を頂戴したいと思っておりますので、申しわけありませんが、よろしくお願いいたします。

きょうは60分ぐらい資料も使いながら話をする時間をいただきました。その後に県議の皆様から御質問を受けたり、意見交換するとお聞きしております。私も話すことがあまり得意ではないことと、この貴重な機会をいただいたので、お伝えしたいということもありまして、たくさん盛り込んでしまったので、大まかな流れと、きょうお伝えしたいと思っていることを最初に頭出しをさせていただいた上で、自己紹介に入っていきたいと思っております。

ざっくりなのですが、私は現在もう完全な一民間人、釜石市民という立場で地域とかかわっています。この前提に基づいて、人口というのは御存じのとおり数ですが、この人口という数の話は正直、国や行政で考えていただきたいと思っています。私たち民間が考えること、やることは、数の話ではなくて、人口や関係人口と言われる数の話と、一人一人がどれだけのエネルギーを地域で発揮できるかといったところ、私はこの数掛ける一人一人のエネルギーや熱量がイコール地域の力、地域力だと思っています。私たち民間が考えることは、この地域力をどうやって維持したり上げていくかであって、税金のベースにもなる人口、数を考えるのは、正直私たち民間というより国や行政の仕事なの

だろうと私は思っています。ということがまずベースとしての私のスタンスです。

そういうスタンスでありながら、もちろん私自身も県や釜石市から発注していただいた仕事を、コンペだったり、さまざまな形で受注して活動している、ということが、私が今やっている大まかなところ です。

私自身についてですが、埼玉県さいたま市の出身で、この後もお話ししますが、さまざまな御縁があって釜石市に住み始めて、釜石市に住民票を置いたのが 2014 年の 10 月 1 日なので、間もなく 11 年になるものです。その当時は、先ほど岩崎友一委員長からも言っていた釜援隊という釜石市が運用していた復興支援員の制度を使って活動していました。2014 年に来てから、震災からちょうど 10 年の 2021 年 3 月までの間は、復興予算を財源とした復興支援員の立場で活動してきました、その財源が終わったので、そこからは完全なフリーランス、個人事業主として活動しています。

そんな人間が何で皆さんの貴重な時間をいただいておりますのかのなのですが、あくまで私はそういう一釜石市民なのですが、一方でもともと復興の仕事をしていたこともあったり、あとはやはり沿岸地域は女性が少ないといいますが、女性で会議などに出てしゃべる人が少ないといったことも多分あると思うのですが、そういう中で釜石市の総合計画審議会委員をやらせていただいたり、今は県の総合計画審議会委員や森林審議会委員もやらせていただいています。

何が言いたいかというと、本当に私は一釜石市民であり、一岩手県民ではあるのですが、やはり自分が縁あって来た釜石市や岩手県が末永くいい地域であってほしいと思っておりますし、その中で自分にできることをしようと、本当に小さいことですが、毎日毎日、新聞を読んで、今岩手県で何が起きているかを調べたり勉強はしているつもりで、そういう審議会などでも機会があれば発言したりということはこれまでしてきたつもりではあります。

冒頭に、幾つかきょうお話ししたいと思っているアウトラインをお伝えすると、私が住み始めて 11 年で、その前から釜石市に通って、震災後 14 年、大なり小なり沿岸地域にかかわっているのですが、やはり今現在の状況というのは、私がかかわってきた中でも本当に一番厳しいと肌身で感じています。その要因は、この後お話ししていきたいと思ひます。

一方で、この厳しい状況ではあるものの、今生き残れた地域というのは、きっとこの先、50 年後、100 年後も続いていく地域になっていくだろうと。これは根拠があるのかというと、ないのですが、私自身は今何とか道を見いだして残っていければ、この先も長く続いていけるだろうと思って、いろいろ仲間たちと活動したりしています。

これは、きょう話すメインではないのですが、これから地域が残っていく一つのポイントとしては、複数の「複」です。複を許容といいますか、それもいいねと言えるような地域が残る、選ばれるのではないかとこの 5 年ぐらいうっすら思っています。

この複とは何だという話なのですが、一つには、私自身もそうなのですが、複数の

の仕事をするのを、それもいいのではないかなと言える、そういう価値観の人が多い地域という意味の複数の複ということが1つ。

あとは、これはいろいろな御意見があると思うのですが、今国でも言っているような二拠点居住やふるさと住民票のような、そういう複数の拠点を持つこと、かかわっていくことも、それもいいね、そういうふうにかかわってくれるのもありだねと思える、言える人が多い地域のほうが残っていきやすいのではないかなというのも、思っているところです。

これは、蛇足ですが、私自身がこの10年さまざまな場所で、発言する機会だったり、どう思いますか、どんなことをやっていったら移住者が来てくれますかね、といったことをいろいろ相談していただく機会も多いのですが、私たち移住者も打ち出の小づちみたいに、聞かれたら何でもアイデアが出てくるというものではなくて、本当に日々釜石市の友人、仲間たちと、一体これはどうしたらいいのだろうということと直面している状態です。だから何だということではないのですが、やはり長く地域に住んでやっている方が、難しいな、わからないなと思うことは、もちろん私たち外から来た者にとっても難しいし、一気にアイデアが出て、これをやったらうまくいくということは正直ないと思っているのです。

ただ、その地域の方々と私たち外から来た人間とが一緒に知恵を出したり動いていくことによって、先ほど言ったように100年先も、200年先も続いていく地域にしていくことは不可能ではないと私は信じていますし、そのために活動しているところです。

ここまでがきょうお話ししたいと思っている大まかなところでした。

ここから、私の自己紹介のようなところに入っていくのですが、私自身が11年前に岩手県に来て、ここで実現したいと思っているのは、自分も含めて岩手県で暮らしている私たちの暮らし、ライフスタイルだったり、働き方、仕事をもっと豊かなもので、もっと選択肢がある多様なものにしていきたいという思いでいろいろなことをやっています。

ゆたかにと、ここを平仮名で書きましたけれども、それは別に経済的にめちやくち稼げるといったことだけではなくて、何か精神的に満足感や納得感を持って暮らせる、働けることが私はすごく重要だと思っていますし、それこそがなかなか東京都だったり、大阪府だったり、都会では難しいけれども、地方、岩手県だったら実現できることが、ある種の豊かさのようなものなのではないかと思っています。

そういう岩手県になってほしいということで、具体的に何をしているかですが、復興支援が終わって、独立してから今現在私がやっていることは主に三つです。一つ目は取材をして文章を書くというライターの仕事、二つ目が一応国家資格を取得してキャリアコンサルタントという、地方で働く方々が納得のいくキャリアを形成していくためのサポート、三つ目としては、これは個人というより団体をつくってやっている活動なのですが、岩手県に移住したいとか、岩手県に移住してきて、そこから住み続けたいと思っている、定住したいという方々のサポートをしています。

主にこの三つのことをやっていて、説明するのもなかなか難しいといいますが、時間がかかるというところもあって、一言で言うと、複数の複のほうの複業のフリーランスですと名乗っています。最近だと地元の県立釜石高等学校や岩手大学で、キャリア教育などでしゃべる機会もあるのですけれども、そういうときもまず一発目には複業のフリーランスですと言って、それはそういう働き方は都会だけではなくて岩手県でも実際やっている人もいますのですよと伝えるために、あえて名乗ったりもしています。

岩手県にも、もちろん釜石市にもたくさんいろいろな企業がある中で、何でフリーランスなのですかと高校生などにも聞かれるのですけれども、私自身はもちろん復興支援員という仕事が終わった後、どういう働き方をしていくかいろいろ考えました。その結果、フリーランスを選んだのは、やはり自分の身につけてきたそれまでの経験やスキルを1個の決まった会社のためだけではなくて、岩手県のいろいろな企業、いろいろな団体に還元、発揮できるのがフリーランスだと思ったので、そういう形を選びました。

実際問題、この働き方になって今4年半ぐらいなのですが、お仕事先、私にとってのお客さんの数で考えると、20くらいです。1回1本原稿書いてくださいという取材の案件もあれば、年間を通じて発注をいただいている企業まで、すごくいろいろなのですけれども、多分20ぐらいの企業や個人で事業をやっている方々からお仕事をいただいている、ざっくりその中の8割ぐらいは岩手県内の企業です。残りは東京都のメディア、冊子をつくっている会社やメディアといった感じです。

たまによく釜石市でライターをやって食っていただけますねといったことも言っていただくのですけれども、正直なところ岩手県内でいただいている仕事の中でも、釜石市や沿岸部からのお仕事は1割、2割です。実際には、住んでいるのは完全に釜石市なのですが、週1ぐらいは別の内陸地域だったり、盛岡市、北上市や、いろいろなところに取材に行ったり、あしたもそうなののですけれども、二、三か月に一遍は秋田県や青森県や宮城県にも取材に行ったりといった感じです。

宣伝も兼ねて、どんな仕事をしているか少しお話しさせていただきますと、皆さんも御存じかもしれないところで、東洋経済オンラインというウェブメディアがあります。これは、全国に読者がいるのですけれども、ここに年間5本から10本ぐらい、岩手県の企業や経営者を取材して記事を書いています。

右に表示したのが、最近に限らず、私の書いた記事の中でPV（ページビュー）、読んでいただいた数が多いランキングなのなのですが、一番読まれたのは大谷翔平選手が何かのウェブのインタビューの中で、地元の好きなものは何ですかと言われて、岩泉ヨーグルトだと答えた記事です。さすがに私は大谷君に取材できるような者ではないので、岩泉ホールディングス株式会社の社長にインタビューして——御存じの方も多いと思うのですが、岩泉乳業株式会社は経営難だった時期もあり、そこから震災の後、台風の被害で全壊したこともありという、本当に2回大きな試練を乗り越えて今の経営となって、あれだけ全国に商品が広がっている軌跡を社長に語っていただいたインタビューが読まれました。

た。あとは去年、ことしも多いですが、熊が岩手県や秋田県ですごく多かったときに、山菜取りをなりわいとしている岩泉町の方が、毎日自分の取った山菜のPRも兼ねて頭にカメラをつけて山に入っているのですけれども、まさにそれで山に入ったときに熊に襲われて、その一部始終、熊が襲ってくるところが映っていました。その方にインタビューした記事や、あと天津木村さんが何で岩手県に来て、今岩手県で活躍しているのかといったキャリアについて書いた記事などをこの東洋経済オンラインという媒体に書いたりしました。あとは御存じかもしれませんが、前に県議をされていた株式会社雨風太陽の高橋博之さんが立ち上げた東北食べる通信という媒体のライターとしてもかかわっていたり、そのほかにも岩手県内の企業、盛岡市の株式会社ヘラルボニーのオウンドメディアに記事を書いたり、釜石市の株式会社中田薬局が若いスタッフに自社のことを知ってもらうための記事や、北上市の北良株式会社のオウンドメディアの立ち上げや、さまざまな岩手県の中小と言われる企業の採用や、情報発信のための記事を書くという仕事もさせていただいています。

これは、岩手県が三、四年前につくった*& i w a t e*というウェブでも読めるブックです。これは、Iターンしてきた方々の暮らしですね。先ほど豊かなと言いましたが、本当に豊かさを感じられる暮らしをしている移住者を特集したブックの制作に携わらせていただいたりといったことを、ライターとしてはしています。

2番目としては、キャリアコンサルタントとしてキャリア形成の支援ということです。釜石市にあるしごと・くらしサポートセンターで——必ずしも若手だけではなく、10代から本当に70代ぐらいまでの方々が割と多い地域ですと、今でもやはり出産、育児のために一回退職する女性がまだまだいらっしゃいます。そういう方々が、子供が小学校に入ったり、小学校3年生になったタイミングでお仕事をしたいというときの御相談の対応をしたり、あとは釜石市とお隣、大槌町の地域おこし協力隊として来た方々の定期的な面談で、目標設定をしたり、任期終了後どういうことをやって地域で食べていきたいかといった面談をしたりということもしています。

今年度の仕事としては、岩手大学が県や商工団体と協業でやっている岩手県の中小企業の人材、中でも自律的に課題を発見して取り組む自律的人材をふやしていくプログラムのコーディネーターもやらせてもらったりしています。

先ほども言いましたが、岩手県の仕事、岩手県で働いている人たちがより納得感を持って満足して働ける、そういう環境をつくっていくために自分にできる形でいろいろなところにかかわっているということです。

三つ目の仕事としては、先ほど言った移住や定住の促進というところで、岩手県の地域振興室と連携して、3年前にいわて地域おこし協力隊ネットワークという一般社団法人を6人で立ち上げました。これは、岩手県に来てくれて地域おこし協力隊として活動している人が今大体260人いるのですけれども、そういう方々が日々の活動をもっと充実させて、一人でも多くの方が任期後も岩手県に残れるように研修の事業をやったり、交流の事業をやったりということに取り組んでいます。

御存じかもしれませんが、地域おこし協力隊は、今岩手県内でも 33 市町村のうち、もう 30 ぐらい、結構な数の市町村に入っている中で、なぜ県単位でこういう研修などをやる必要があるのだらうと、もしかしたら思われるかもしれませんが。地域おこし協力隊は多い自治体だと 1 個の自治体に 20 人くらいいるのですが、少ないところだと本当にそのまちに 1 人や 2 人しかいないところもあって、そうすると同じ立場、ポジションの方がいないので、活動する中で、これどうしようとなったときに相談できる人がいなかったり、今は若い人も結構多いので、新卒や第二新卒の人たちが行政や地域とのコミュニケーションの取り方にやはり悩むこともあるのです。そういうときに、私たちのつながりがあって、隣町の協力隊とつながることによって、ちょっとした相談を隣町の隊員にしたりして、一つ一つの悩みを解決しながら進む力になれているのかなと思ってやっています。

このメンバーで、よく新聞などにも取り上げられているのが一番右にいる高野という葛巻町の OB の者で、彼がリーダーといいますか発起人ではあるのですが、それ以外に私も含めて、洋野町や花巻市、一関市、大船渡市の協力隊の OB、OG が中心になって、300 人ぐらいいる隊員向けの研修会などをやっています。

私自身のなりわい、仕事という部分では、今お話ししてきたライターの仕事とキャリア支援の仕事と移住、定住の仕事という大きく三つなのですけれども、それ以外の部分で釜石という地域にはいろいろかわらせてもらっています。

その一つが NEXT KAMAISHI という地域づくりの団体です。これは、特に法人格などを取っておらず、震災の 1 年後に地域の当時 30 代、今 40 代の私の同世代ぐらいの人たちが立ち上げた団体で、立ち上げ当初は震災後、頻繁に釜石市に通ってきていた東京都などのボランティアの人たちも結構アクティブに活動していました。大きなところだと釜石よいさという町なかの祭りが、もともとは新日鉄の高炉の火が消えるということで、町なかのにぎわいを取り戻そうと始まったものだったのですけれども、それが震災で途絶えてしまって、釜石よいさを復活させようとこの NEXT KAMAISHI が動き始めたという経緯があります。

私自身は、震災直後には入っておらず、4 年前に独立するタイミングで、釜援隊がなくなって、やはり少し地域の人との接点が減ってしまうかなという危機感もあったので、そのタイミングでこの NEXT KAMAISHI に入りました。

会長としてずっと活動しているのが、釜石市で有名な泳ぐホタテをやっている有限会社ヤマキイチ商店の君ヶ洞剛一さんです。彼と私は同い年でもあり、一緒にこれからの釜石市のことを考えている友人なので、彼から声をかけてもらったこともあって、この NEXT KAMAISHI の一員として活動しています。

一体何をやっているのかというと、今は鶴住居復興スタジアムで開催している釜石よいさを主にやっていますし、それだけではなく、今後の釜石市がどうあるべきかを考えるために、今はいろいろ学ばないといけないフェーズだと私たちは思っていて、もともと月 1 回の定例会は、コロナ禍がととてもひどいとき以外はこの十数年続けているのですけれども、

この定例会以外に、この2カ月ぐらいは勉強会をやっています。何を勉強しているかというと、1回目は、今の釜石市は小中学校の統合再編というテーマがあるので、それについて勉強したり、魚市場について勉強したり、年度末に向けては、そもそも私たちは行政の予算、決算の仕組みがよくわかっていないので、そういうことを勉強する会もしようと言っていたりしています。

そういう勉強会があったからというわけではないのですけれども、このNEXT KAMAISHIのメンバーから、前回の市議選に2人立候補して、今2人とも議員としてすごくアクティブに活動していて、彼らも勉強会に出るので、私たちの勉強会の内容も、市政に何らかの反映をしてくれているのかなと思っています。

もう一つは、世代によっては御存じだと思うのですが、釜石市はかつて釜石大観音という一大観光名所がにぎわっていました。今も年末年始は結構お客さんが来るのですけれども、そこのお膝元の仲見世商店街は、二十幾つある店舗が一時はもう一軒もやっていない状態になっていて、そこにもう一回にぎわいを取り戻そうと、地域の人たちや移住者が一緒に年2回マルシェをやったり、出店する店舗を誘致したりしていて、その活動に私も若干ですが、かかわっています。

こういう仕事以外の活動を通じて、地元の同世代やママさん世代、子育てしている世代とも結構かかわる機会があって、その中で今の釜石市の課題や可能性があるところを感じる機会があります。

私の自己紹介をもう少し続けさせていただくと、そもそもなぜ岩手県に来たか、ですが、実は私は20年ぐらい前に、この県議会事務局にもよく出入りしておりました。というのは、2001年に毎日新聞社に入社しまして、本当に偶然配属されたのが盛岡支局でした。当時盛岡支局は、今は駐車場ですけれども、おでつての隣の隣のもりおか啄木・賢治青春館とホテルの間にあって、そこに4年間勤めていました。

本当に偶然盛岡市に配属されたのが正直なところだったのですけれども、そこで4年間取材をしてみて、岩手県の暮らしと文化の豊かさにすごく引かれたのです。それは何かというと、一つは、私は埼玉県郊外で育ったので、あまり農業や林業など身近になかったのですけれども、当時は盛岡市に住んでいたのも、盛岡市にいと本当に町なかに住んでいても、5分、10分行けばすごくたくさん産直もあったり、田んぼや畑が広がっています。本当に自分が住んでいるところのすぐ近くで食べるものがつくられていて、釜石市でも甲子町の藤原誰々さんのトマトと出ていますけれども、誰がここでつくったかがわかるものを日々買ったり、自分でつくったりしながら暮らせることも、やはり都会にはない安心感といいますか、豊かさだなと思いました。あとこれはよく言われることですが、中津川べりは、川がきれいなだけではなくて、その周りにあれだけ南部鉄器の工房が幾つもあって、雰囲気の良い喫茶店もあったり、大正時代の建築もあったりという、一朝一夕にはつくれない文化の蓄積があります。盛岡市というまちは、京都府のようにそこに人があまり住んでいない、そこがもう世界遺産だったり、商業的な、お金持ちが泊まるホテルが

あるといったものではなくて、そのすぐ隣に人も住んでいるし、普通に買い物をしている豊かさがすごくあると思っています。釜石市もすごく好きなのですけれども、そういう意味では本当に盛岡市という土地の素敵さを感じていて、4年間盛岡市、岩手県で取材をする中で、本当に岩手県はいいところだなと思いましたし、そのときはあわよくば定年したら盛岡市に住みたいと思っていました。

とはいえ、やはりせっかく全国紙に入って、いろいろ取材したいということもあったので、その後東京都の本社に転勤しまして、その後は大阪府の本社にも転勤して、さまざま取材していました。

大阪府にいた3年目がちょうど終わるころに、東日本大震災津波が起きました。この震災のことについては、大阪府にいた私よりも皆さんのほうがずっとリアルにお感じだと思うので、ここではお話ししませんけれども、盛岡市で取材した時代に、盛岡市だけではなくて沿岸地域にも通って取材していたので、沿岸地域にもお世話になった方もいましたし、毎日新聞にも釜石市の支局にベテランの記者もいたのです。お世話になった記者も避難所にいたので、そういう方々を訪ねて物資を持っていたり、ボランティアに行ったり、震災翌月から1カ月置きぐらいに大阪府やその後転勤した東京都から岩手県に通うことを3年ほど続けていました。

この写真は、見る人が見れば懐かしいと思います。大槌まつりの写真で、右のドームも今はここを盛土しているので、ないのですけれども、2012年にあった大槌まつりに取材に行って、三陸地域の祭りの熱量、パワーにすごく圧倒され、それ以来毎年大槌まつりに通ったりしながら、一方で新聞記者として紙面でさまざまな被災地のその時々の課題を取材して書く、ということをしていました。

当時入札不調がすごく深刻になっていて、釜石市の町なかに建っている災害公営住宅も、1年ぐらい、なかなか建設工事を受注する業者が決まらなくてどんどん工事がおくれて、仮設住宅で孤独死といいますが、亡くなる方も出るということを最後のほうに取材して、全国版の紙面に書いていました。

書いていたのですけれども、そういう入札不調のような構造的な話は、記事を書いたらそれでがらっと問題が解決して復興が進むという単純な話ではなくて、誰が悪いからこうなってしまうという話でもないのだということに直面したときに、無力感とは言いませんけれども、これ以上自分が記者をやってもなと思う時期があり、おのずとキャリアチェンジ、転職を考えるようになりました。

そうしたときに、やはり自分は復興のただ中で、もっと直接的に何か被災した方々の力になれるようなことがしたいなと思いました。当時33歳くらいでしたか。そう考えたときに、被災地の仕事や復興を担う仕事は、当時はすごくいろいろな人材の募集があったのですけれども、先ほども言ったように、私自身はやはり岩手県の魅力や、都市にはなくて岩手県にあるものは、1次産業がある暮らしの豊かさだったり、1次産業を担っている人たちのたくましさや力強さであり、被災地のすごい原動力だと思っていたので、そういう方々

の力になれることがしたいと思っていろいろ調べているうちに、釜援隊という組織と出会いました。

釜援隊については、もう既にないいいますか、終わった話なので、きょうはそんなに細かくはしゃべらないのですけれども、私はこの後でお話しするように、森林組合のサポートをしていたのですが、地域のNPOに派遣されているメンバーもいたり、そのもう少し後になると漁師の担い手育成のプロジェクトに配属されているメンバーもいましたし、仮設住宅から災害公営住宅に移る方のコミュニティー形成などをサポートしているメンバーもいました。本当にコミュニティーや、産業、観光などさまざまな復興の課題の解決に取り組んでいく組織にメンバーを送り出すような組織でした。

私自身も、この2番、赤で囲みましたけれども、移住してきた自分たちが表に出てどんどんやるということではなく、志があって復興を進めたいと思っている地域の人たちを支える黒子であるところにすごく共感して、この釜援隊という組織に入りました。

そこで、森林組合の高橋幸男さんという組織のリーダー、今は理事兼参事になっているのですけれども、ずっと参事として職場を引っ張ってきている方と出会いました。この高橋さんが、地域は被災して、当時は水産加工の企業なども一時的に営業できなかつたりした時期もあったのですけれども、地域に山はあると。被災して釜石市、大槌町にとどまるのか、内陸などに引っ越して別の仕事をするのかと悩んでいる若い人にとって、間伐すべき山があるから、林業をもっと魅力的な仕事にすることによって、林業が仕事の選択肢になっていくようにしたいというすごく強い思いを持っていたので、私はその高橋さんの考えに共感して、それを形にするということを6年間ぐらいやっていました。

ただ、どんどん復興のフェーズは変わっていったので、途中から雇用の確保や人材育成だけではなくて、東京都など、さまざまなところから釜石市の木を使いたいというニーズを聞き取って、木材の規格だったり、家具という形で納品するような木材の流通関係のことをやったり、ワーケーションで釜石市に来る企業に植樹活動をしていただくとか、一言で言ってしまうと外から釜石市や釜石市の山にかかわりたいという人たちが持っているアイデア、その人たちが持ってくるお金などを釜石という地域や釜石市の森林につなぐコーディネーターをこの6年間やってきました。

毎年五、六百人が視察に来てくださったり、物もつくったりしている中で、2017年に釜石市の尾崎半島で413ヘクタールを焼く大きな林野火災がありました。ことしは、大船渡市の綾里、赤崎地区でもっと大きい山火事があって、先ほど言った森林組合の高橋さんも、私も、県の皆さんも、本当にこれはどうしたらいいのだろうという感じなのですけれども、この2017年当時としては、釜石市の山火事もすごく大きく、この写真で見えますけれども、このリアス半島が見渡す限り焼けてしまった。これは、もう焼けてしまつて伐採した後なのですけれども、この辺が全部黒焦げというような山です。大船渡市は、この7倍以上の面積がこういう状態なのだと思うのですけれども、そこに地域の親子や高校生、東京都から来る企業などと一緒に植樹活動に行つて、50年先に山ができていところまで一緒にか

かわってもらおうと、外から人を呼び込むこともやってきました。

そういうさまざまなことを行っていたのがちょうどラグビーワールドカップが控えていた時期だったので、市役所と連携して、スタジアムにこの山火事で焼けてしまった木を使わせていただくことも実現できました。

私としては、先ほど写真にあった高橋さんや当時の久保知久組合長といった方々——本当に滅私奉公という言葉は古いかもしれませんが、地域の人のため、地域の山をよくするために働こうと思っている方々と知り合えたことは、釜石市に来て一番大きい財産だと今も思っていて、きのうも組合事務所に打ち合わせに行ったり、久保知久さんの家はうちの近所なので、月1回は遊びに行ったりといった御縁が今も続いています。

釜援隊としては主に森林組合で外の人とつなぐことをやってきて、それが8割ぐらいだったのですが、残り2割ぐらいの部分で、当時から岩手県に移住者を呼び込むことはやってきていました。具体的に言うと、ちょうど国が地方創生と言いだした2015年から5年間は、岩手県が移住交流体験ツアーを実施していたので、株式会社みちのりトラベル東北と一緒に移住交流体験ツアーのプログラムを毎年4本つくって、毎回15人ぐらい東京都や大阪府から参加してもらって、その中で移住したいという方々についてはサポートして移住してもらおうということもやってきました。

この数字が多いか少ないかの判断はいろいろだとは思いますが、5年間やった中で、少し資料の数字は古いのですが、25人ぐらいの方がこのツアーの後、岩手県にUターン、Iターンをしたという実績は一応ありました。ただ、この事業はコロナ禍で終わりました。今は各広域振興局や市町村ごとに、こういう移住のツアーは力を入れてやっていると聞いております。

このような感じで釜援隊は終わって、一体何をやろうと考えて、これまで話してきたように、何か自分にできること、この復興というプロセスで自分がやってきたことは何だろうといういろいろ考えた結果、フリーランスでやろうと独立しました。

高校生、大学生にあえて話しているのですが、かといって私のこれまでのキャリアが全部順風満帆だったかということもそんなこともなくて、新聞社にいたときにはいろいろモチベーションが下がったこともありましたが、実際釜援隊が終わって独立するときには、フリーでどれぐらい仕事をしたら生活できるかもイメージが湧かないので、仕事をやり過ぎてしまったり、あまり得意ではない仕事も受けてしまったりして体調を崩すといったことなどもありました。そんなこともあった上で、今のように自分の中でいいバランスといいますか、納得して、この仕事は自分がやる意味もあるし、ちゃんと成果を出せると思える仕事をするというところに4年かけて何とかやってきたかなというところです。

最後に、今私が沿岸地域に住んでいて感じているところをお伝えしたいと思います。最初にも言ったように、本当に今の沿岸地域の状況は厳しいと思っています。何で自分がそう思っているのかとこれを機に言語化してみたのですが、一つは、これは釜石市だけではないですが、やはり漁業がきついということです。

私も農林漁業の取材が好きだし、漁師の友達も結構いるので、それこそ浜にワカメの手伝いに行ったり、一緒に飲んだりします。50 歳ぐらいの釜石市の漁師は、津波で家も船なども全部流されたけれども、でもあの震災のころより今のほうが本当にきついし、将来が全然見えないよと言っていました。これは、その人一人ではなくほかの人も言っていますし、加工屋などもそうです。三陸地域のものに限定してやっていた加工屋などは、本当に立ち行かなくなっていて、国内外問わず原料を広く確保するという道か、もういっそ魚介類ではないものを確保するかといった話もあります。

直接私は経営者にお話を聞いていませんけれども、釜石市だと岩手缶詰株式会社の釜石工場の操業が中止になったと岩手日報に載っていましたし、うわさレベルなので、ここで言っているかわからないですけれども、工場は一回とめるとまた稼働させるのはすごく難しいのだとほかの加工屋からは聞いています。だから、一つはイカやサバといった資源が枯渇しているということと、二枚貝、ホタテやカキに関しては、貝毒の制限が5月からずっと続いていて、私も全浜は把握していないのですけれども、釜石市あたりだとまだ二枚貝は解除になっていないはずなのです。そうすると、もう4カ月、5カ月出せない、取引ができない状態になっていて、本当に切実だと思っています。

それが海の関係で、それと一部はかかわるかとは思いますが、飲食店についても本当に厳しい状況だと思います。魚河岸テラスという施設の中に入っている飲食店も1軒、この2カ月ぐらいで閉店してしまったり、釜石市のミッフィーカフェも来月には閉まってしまって、今は次にやる事業者の公募がかかっている状態と聞いています。

それ以外にも、もっと小規模ですが、私の友人の移住者がやっていたお店も閉まってしまったり、これは彼のライフステージの変化もあるのですけれども、本当に飲食店の閉業が後を絶たないと感じています。

あとは、町なかの旅館も閉まってしまったり、ホテルに関しても、これは全国的な流れかもしれないのですけれども、地元資本だったところが大手のスポンサーが入ったりといった感じがあって、町なかで、それこそ森林組合の100人規模の総代会や、昔だったら結婚式や、最近だと浜千鳥のイベントなどをよくホテルの宴会場でやっていたのですけれども、そういうことができるホテルがなくなってしまったといったこともあります。

最後の二つは私の完全な主観なので、データなどはないのですけれども、私は生活スタイルが割と遅めなので、大体夜の7時半や8時にスーパーに行くことが多いのです。都心だとこれでも早いほうで、スーパーが混むのは8時、9時だったりするのですけれども、釜石市のスーパーは7時ぐらいに行っても、もう結構がらがらだったりします。

震災から3年、5年は、工事関係者などが多かったのですが、8時、9時にスーパーへ行くと、お総菜コーナーに男性の工事作業員がすごくいて、みんな500ミリの缶酎ハイと枝豆や2割引、3割引の唐揚げを持っている感じだったので、そういう光景がなくなっているのも、やはり完全に人の構造が変わっていると感じます。

あと、これもやむなしの部分はあるのですけれども、やはり私たちと同じころ、震災後

3年、5年に移住してきた中で、コロナ禍もあって、地域を離れる人もいたりします。地域を去ってしまうブームはもうとうに終わっていて、2020年ぐらいに結構帰る人は帰ったなという感じがあったのですけれども、そこからもやはり毎年度帰ってしまう人がいるのは、何となく寂しい部分もあったり、中には東京都で生まれ育った人だと、子供の教育が心配だから東京都へ戻りますという人もいたりします。

今の話だと、本当に全く希望が感じられないと思ったかもしれないですけれども、私自身は厳しいとは思っていますけれども、希望がないことはないと思っています。釜石市がすごいと思うのは、先ほど例に挙げた宴会ができるホテルはなくなってしまったのですけれども、でもこれは地域の人たちも困っているし、何とかしなければいけないよねと、釜石まちづくり株式会社という第三セクターが、自分たちが持っているTETTOという公共施設の固定式ではないホールのだっ広い部屋にケータリングなどを手配して、浜千鳥を楽しむ会という五、六十人強のイベントをできるように、メンバーが努力して実現していました。なくなってしまったものをやばい、やばいと言うだけではなくて、やはり自分たちの釜石市なのだから、ホテルをまた引っ張ってくるとか、やらせることはできないけれども、自分たちで何か代替手段を考えようと思う人、それに向かって実際動く人がいるところが、私はこの釜石市というまちの底力だと思っています、そこに希望や可能性があると思っています。

もう一つ、個別の話で御紹介すると、幾つか新しい意味での希望といいますか、それまでなかったものが釜石市に生まれたり、一回なくなってしまったものを復活させる動きも実はあったりします。

一つ目は、右下に写真を置いた菊池由美子さんという、おとし釜石市にUターンしてきた方なのですが、たしか18歳で釜石市を離れて、そこからずっと東京都働いていた方です。彼女がおもしろいのは、タレント、女優に本人がなりたくて、上京して竹下通りでスカウト待ちをした思い出があるそうなのです。彼女のころというのは、今もそうだと思うのですけれども、やはり女優になりたい、タレントになりたいといったら、都会に出て一旗上げることが多かったと思うのです。彼女は実際にそうやって芸能活動やナレーション、アナウンスのお仕事もしながら、東京都で映画の制作にかかわってきたのです。映画で、よく最後のエンドロールに何とか映画制作実行委員会と出ると思うのですけれども、その実行委員会を裏方で支えるといったことを何十年もやってきて、芸能関係のノウハウもあるということで、自分は釜石市にいるまま芸能を目指すことはできなかったけれども、今の時代、釜石市にしながらタレントになりたい子供たちの夢をかなえる事業をしようと思立って、実際釜石市でその事業を始めました。

すごいと思うのは、おとしUターンしてきて、この事業をやろうと既にプランといいますか考えがあったところではあるのですけれども、もうあれよあれよという間に企画書をつくり、それを商工会に持って行ったり、私のように知り合った人のところに意見を聞きたいと言って来たりしていました。私も彼女に意見を聞きたいと言われたので、先ほ

ど言ったNEXT KAMASHIの会議に連れて行って、いろいろな子育て世代、中学生、高校生がいる親世代に話を聞いたり、企業の人にヒアリングに連れて行ったりなどする中で、あっという間に、1年たたないぐらいでちゃんともう事業として立ち上げて、講師も有名な人なども呼んだりしています。たしか由美子さんが20人ぐらい募集すれば採算が合うと言ったのですけれども、正直私も含めて釜石市にずっといるメンバーは、いや、来て七、八人ではないのと。3年、5年かけたら、知名度も上がって20人ぐらいになる可能性はあると思うけれども、まず7人とかで考えたほうがいいですよと話をしていたのですが、実際初年度から23人ぐらい集めてやっているのです。

私自身は芸能活動という業界には全然詳しくはないし、この事業がどうなっていくかわからない部分はあるのですが、やはりこういうムーブメントがあると、地域にいる人たちも自分たちはもう釜石市のポテンシャルといいますか、釜石市は人口も減っているし、いろいろ難しいよねと思う部分もあるのですけれども、戻ってきた人がやったら、これだけ形になって動き始めていると感じられるということは、この由美子さんだけではなくて、周りにいる私たちも何か希望が持てたり、元気になれるようなところがあると感じています。

この右上のQRコードは、この由美子さんのことや今からお話しするケースについて、私がブログのような記事に書いたものなので、御興味がある方は読んでいただけたらと思って貼っておきました。

この由美子さんの事業は、C-Zeroアカデミーなのですが、それ以外にも釜石市の高校生とお母さんがCrush onと+1（たすいち）というお店——レンタルスタジオと古着屋を仲見世通りで新しく始めたという動きもことしになってからありました。

あと、もう一つは、甲子町という遠野市との境のほうに、こすもす公園という震災後仮設住宅で暮らしている子供たちや、校庭や公園に仮設住宅が建ったことによって、遊び場がなくなってしまった子供たちの憩いの場になっていた公園がありました。その公園をやってきた藤井さん御夫妻が80歳ぐらいになって、もう続けられないということになって閉じたのですけれども、その藤井さん夫妻をすごく尊敬していて、かわいがってもらっていた移住者の石塚佳那子ちゃんが、少し形を変えてこのこすもす公園を復活させるプロジェクトを始めて、クラウドファンディングで300万円ぐらい調達して、たしかおとといぐらいに、農園とカフェになって復活しました。

たまたまこれは三つとも女性が始めたものなのですが、こういう動きが西のほうの甲子町と町なかと仲見世とで起きていることによって、それぞれの事業は何億円といった大きいものではないのですが、周りにいる私たちも含めて、何か希望を感じさせる、小さいことも地域にとってはすごく希望になると思っています。

それとともに、SNSを見ると、釜石市や周辺の若手生産者、主に漁師や小さい魚屋、水産加工屋がInstagramの発信をすごく頑張っています。私も乗ったのですけれども、イカやヒラメを釣らせる釣り船の船長と奥さんが毎日Instagramで発信していて、内

陸地域だったり、宮城県などからもたくさん釣り客が来ている、それがInstagramの中で感じられるといった世界があったりもしています。

私たち、40代の世代は、震災復興という歴史に残る大きな出来事があって、それによって人生観が変わったり、何かがあって移住をしてきた層なのですけれども、地域おこし協力隊などを使って、今また20代や30代前半の移住者が来ているというところも、彼らの可能性は未知数ではありますが、同時にすごく無限大にあると思うので、そういう人が来てくれるということは、まだまだ釜石市や三陸地域に、彼らにとって何かおもしろそうだなと思われる魅力があるのではないかと思います。

私自身は、東京都でも福岡県でもいいですけども、大きいまちではなくて、こういう小さい地域で活動している魅力は三つありますと移住を検討している人などにはお伝えしています。それは、やはり何か自分がやったことが誰かの役に立っているという手応えが日々感じられることです。私で言えば森林組合の高橋さんや組合長ですし、由美子さんの活動で言えば、まだ例えば中学生で釜石市を離れる決断はできないけれども、釜石市が好きだし、釜石市にしながらタレントを目指したい子供の役に立っているということもあります。先ほども言ったように、何か自分がやったことは釜石市では初めてのこと——タレント事務所は、例えば東京都に行ったら幾らでもあるかもしれないですけども、岩手県や釜石市でのタレント事務所は唯一無二で、それによるインパクトも実感しやすいということもあります。

とはいえ、多分皆さんもお考えになっておられるとおり、そのインパクトや手応えだけで食っていけないというのはそのとおりで、何かそれを裏打ちする最低限の収入や、この時代なので、仕事をしながら家族のことを大事にすることももちろん大切だということは、私も重々承知しています。

その中で、釜石市は沿岸地域の中でも働く場所もあります。誘致企業もありますし、そういう企業は休みがすごく取れるという話も聞くので、そういう意味で働きやすいところで働けるというメリットもあると思います。

一方で、私は経営者の仲間も結構多いのですが、採用して2年、3年たった社員が、誘致企業のほうがちゃんと休みが取れますという理由で転職されたことも実際聞きますし、釜石市ではないのですけれども、ある市役所の職員だった夫婦が、2人で誘致企業に転職して、その市役所がすごくざわついたということがありました。実際そういうこともあるので、やはり雇用する側の見方と雇用される労働者、働く側のどちらで見るかによって、物事は両面あるなと思っています。

ここで最後に、先ほどの複数の複の話の回収すると、私自身が思っているのは、今働き方改革もあって、どんどん雇用の中で働ける時間は短くなっています。それによって、例えば地域で郷土芸能をやる時間や家族との時間がふえていいという人ももちろんいて、それもすばらしいのですけれども、一方でもっと働きたい人もいます。実際私の周りにもいます。そう考えたときに、もっと複業、例えば誘致企業といいますか、サラリーマン

として働きながら、ちょっとした小商いのことをやるでも、コーヒーショップをやるでも、そういうことがもっとやりやすくなると、安定した収入も得ながら、何か挑戦したり、いろいろな地域でやっている価値を感じられることになるのではないかと私は思っています。

最後にまとめると、私自身は地域の価値や地域力、地域の力は、数ではなくて、一人一人のエネルギーや行動の量の総体が地域力だと、10年ぐらいいろいろ考えた結果、そうだと思います。

そのエネルギーは何だろうと考えると、やはり本人がやりたいと思って何かやっているということ、そこにわくわくしているということ。だからこそ、そのわくわくしていることに周りの人たちも巻き込まれて、由美子さんのアカデミーを手伝おうとか、そういうことになってくると思うのです。そういう意味では、本人、主体である原料が燃えているということもそうだし、そこに周りが巻き込まれていくといったことの両方ともあるからこそ、地域というのは地域力が上がっていくし、持続的なものになっていくのではないかと思っています。

ちょっと説得力があったかどうかはわかりませんが、今すごく厳しいことも多いですが、今生き残れた地域は正の循環といいますか、プラスの循環できっと50年、100年先も続いていく地域になるのではないかと考えております。

お聞き苦しい声でしたが、最後まで聞いていただきましてありがとうございました。(拍手)

○岩崎友一委員長 手塚様、貴重な講演ありがとうございました。

では、これより質疑、意見交換を行いたいと思います。ただいま御講演をいただきました内容に関しまして、質疑、御意見等ございましたらお願いいたします。

○佐々木朋和委員 私は、一関地区の選出なのですが、写真にあった櫻井陽君とは仲よくさせていただいております。今一関市も地域おこし協力隊が、市に複数ではなくて、旧市町村に複数ぐらいの形で、非常に多くいただいているのですが、キャリアコンサルタントのお立場からお聞きしたいと思うのですが、地域おこし協力隊の3年の任期が終わった後に、どうやって地域に残っていただくかが非常に大きな課題だと思っております。今どちらかというと、地域も何か起業することを期待している、新たに事業を起こして、それで仕事をつくることを何か使命のように押しつけているのではないかと感じるところもあって、その中で資料の中にOB、OGの方への岩手の仕事紹介、マッチングという考え方があって、本当に普通に地域の職場に就職しながら、岩手県らしい生活をしていただくだけでも、地域としてはプラスになるのになと思っていたところなので、非常に共感したところであります。地域おこし協力隊が任期後に地域に残っていくためには、どのようなキャリア形成のアドバイスをしていらっしゃるのか、ぜひ教えていただければと思います。

○手塚さや香参考人 本当にとても本質的といいますか、私たちが日々悩んでいるところ

なので、こうやれば定着率が上がりますというお答えまではできないのですが、私や櫻井陽君が考えていることは、地域おこし協力隊で来る方は結構ミッションといいますか、業務内容が明確になっているので、例えば地域の食材を、この伝統野菜を発信して持続的な作業にしましょうといったものが仮にあったとすると、そのミッションに直結したところでの人のつながりはすごくできるのですが、それ以外の少し離れたところについて、3年間であまり接点を持てなかったりします。例えば隣町で伝統野菜をやっているならできるかもしれないですが、一戸町でやっている人が盛岡市や一関市で近いミッションの人と必ずしも接点を持てるかというとそうでもなくて、そうすると例えば一関市のこの野菜がつかずいたら、もうそれ以外に何か出口といいますか道がないという、思うように3年間ですごく視野が広がるわけではないのです。

私自身は森林組合にいたので、釜石市、大槌町あたりの林業や木をひく製材、家具屋とは御縁ができたけれども、もっと広くとなると全然十分ではなかったのです。でも仮に何か事業でやっていこうとすると、そういう狭いエリア間だけでは商売はできないので、もっとつながりが必要だったり、もしその人が林業なり木材関係が続けたいと思ったときに、もしかしたら、これは市町村の方や職員の方はよしとしないかもしれないですが、一関市には自分を雇用する企業がなかった、一関市で林業の会社に就職できなくても、平泉町ならあるという可能性はあるのです。ですが、地域おこし協力隊は市町村単位で原則やっているの、市町村にしてみたら、隣のまちに定着するよりは、やはりうちの市に定着してほしいと当たり前と思うのです。何が言いたいかというと、もう少し広いエリア間、県南地域や、何なら岩手県全体ぐらいのエリア間で、移住者や協力隊として3年間頑張ってきた人とうちで働いてほしいという企業がつながれるような場ができればいいと思うのですが、それが隊員本人や市町村の担当者の世界観、人脈の中だと結構難しいのです。

全然回答になっていないですが、そのあたりが何か広域で取り組めたらいいなと、私もそうですし、櫻井君も多分感じていることだと思います。

○佐々木朋和委員 全くそのとおりだなと思います。

岩手県としても地域おこし協力隊を受け入れた時期もあったのです。今はやめてしまっていますが、そういった意味では広域でやる意味もあるのだと感じましたし、先ほどおっしゃったように、最初にミッションを見たときに、これで3年後も独立していくのは厳しいというミッションの中にはあるのです。そういったミッションの中でなかなか地域に残れないとなったときのフォローや、あるいは最初のミッションの立て方についても、市としても3年後もその分野で持続して活動していけるミッションを掲げて募集することも必要なのだと同時に感じさせていただきました。

○手塚さや香参考人 例えば一関市ですと、私たちのいわて地域おこし協力隊ネットワークで募集要項をつくって、採用から櫻井を中心にやっております。この櫻井陽君自身が一関市の協力隊をやって独立している人なので、どういうエリア間とか、どういう業務だっ

たら独立につなげられるかというところまで彼自身の経験も踏まえて設計しています。募集時点で業務内容ができてから、隊員自身はそれが本当に事業になるかならないかは、来る時点ではやはり見えない部分もあるので、そこは募集や採用する行政や、今中間支援団体といって、それをサポートする民間も入れるようになっていて、その精度をどれだけ上げていくかは、本当におっしゃるとおりすごく重要だなと日々感じています。

○福井せいじ委員 いろいろ参考になりました。

61 ページの地域で活動する魅力を見て、私は非常にインパクトを受けました。外から入ってくる人が地域で活動する、先ほど手塚さんは移住を検討する人に伝えていることがこれだとお話ししていたのですけれども、私は実は人口減少時代に、地域の中では外に出ていく人をどう食いとめるかも必要だと思ったのですが、この地域で活動する魅力は、なかなかここに住んでいる人はわからなかったなど。逆に言えば、外から来てくれた人が感じることであったのだと思ったのです。こういう魅力を本当は住んでいる人が感じられたら、この地域で実は活躍できるのではないかと思ったのです。そういう意味で、これはなかなかいい考え方だなと思ったのですけれども、これは実際手塚さんが感じたことであり、そしてまたこのことを話すことによって、やはり地域おこし協力隊の人も活躍しているということです。いずれ私は地元にいる人もこういうことを感じられれば、地域で活躍する人がふえるかと思ったのですけれども、どうでしょうか。

○手塚さや香参考人 それは本当におっしゃるとおりだなと感じています。最近でも例えば隣の大槌町で地域おこし協力隊としてUターンした、ちょうど10年東京都にいて戻ってきた方がいるのですけれども、彼と定期的な面談をやっている中で、やはり一度離れて見てきたからこそ感じることで、見えることがあると言っています。ただ一方で、そこにUターン、Iターンしてきた人間がいる意味がもしかしたらあるのかなと今思っています。一回離れたり、外から来ているからこそ、釜石市では当たり前かもしれないけれども、ほかにはない——例えば私は早取りワカメがすごく好きなのですけれども、こんなワカメはほかでは食べられないのですよといったことであったり、漁業権の関係でウニの船には乗れないけれども、東京都から来た人たちと取ってきたウニの殻と一緒にむいて、それは出荷するけれども、質が少しよくない、崩れてしまったのは一緒に食べるということをやっている漁師もいたりします。それがすごく特別で、ほかにはないことなのだというのを、外を見てきている人間は伝えられるではないですか。伝えることによって、自分のつくっているワカメやウニは、そんなに喜ばれるものなのだという実感を得ることは手応えになると思います。この結論がいかかわからないのですけれども、隣町でもいいからほかを見る経験が必要だということは、それはかねがね思っているのです。もちろん岩手大学や県立大学など、岩手県の大学もすごく新しい取り組みをやっているいいのですけれども、一回岩手県の外を見る、釜石市や沿岸地域であれば盛岡市に出て盛岡市の大学に行くという、何か別も見て相対化する経験は、国や県の政策としてどうかかわからないけれども、私自身はやはり必要だとは思っています。全然答えにならなかったのですけれども、すみません。

○吉田敬子委員 手塚さんのこれまでの活動をこれからも応援させていただきたいと思っていますし、よりゆたかに、より多様に、複ということが広がるといいなと改めて思ったのですが、資料の中にあるとおり、打ち出の小づちのようにならないところで、率直な感想をぜひいただきたいです。今 11 年、移住しては 10 年ほど住まわっていて、岩手県では、例えばことは特にジェンダーギャップやアンコンシャスバイアスに力を入れなければいけないとやっていますけれども、本当に率直に手塚さんが釜石市に住まわれて、言える範囲内と言うとあれですけれども、こういったところにいろいろ困難があるということなども含めて、ぜひ教えていただけたらと思います。

○手塚さや香参考人 ジェンダーギャップの話は、自分が感じていないから存在しないということは絶対ないと思っています。私自身は多分私のキャラクターだったり、もう 30 代後半ぐらいの年齢で、元新聞記者だったということもあったりして、あまりそういうアンコンシャスバイアス的な目にさらされる経験は割と少なかったのですけれども、やはり何かその手の会議などで同世代の主に女性が集まった会議などですと、本当にこの令和の時代にそんな発言をされることがあるのかといった話があります。自分が経験していないから、ということとは全然ないと思っていますし、いろいろ表現は考えてしまうところではあるのですけれども、これは日々の暮らした的な、家単位などの家族、家といった小さい単位で発生しているものから、割と近現代といえますか、現代的な職場のようなところで発生しているものまで、すごくいろいろなグラデーションがあります。県、広域振興局のそういう会議にも声をかけられて出たりしたのですけれども、やはりそういうところで話をすると、まずは職場という単位からでないかと取り組めないと。なぜならば、家族間の話になってしまうと、政治的なこともあるし、そこに行政として入っていくのは難しいから職場なのです、という話をされるのですが、やはり本質的には、家や家族内での、親世代、60 代、70 代の考え方によって、その子供である私たちの世代もそうだし、その子供である今 1 桁、小学生の価値観も形成されていくものなので、職場の女性活躍とか、トイレがどうこうとか、そういう話だけではなくて、もう少し価値観として、どういう社会が生きやすいのかということから掘り下げていかないと、職場の待遇改善などという話だけしていてもだめなのではないかと私は感じています。少し抽象的な話ですみません。

○岩崎友一委員長 ほかいかがですか。よろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○岩崎友一委員長 では、そろそろお時間にもなりますので、ここで終了したいと思います。

手塚様には、本当に貴重なお話をいただきましてありがとうございます。きょうの講演にもありましたように、厳しい現実是谁もわかっておりまして、ただ厳しい厳しいだけでは何も変わりませんので、きょうのお話にもあったように、やはりできる人ができることをしっかりとやっていくことも大切だと思います。手塚様には引き続き岩手県の、三陸地域の復興のために御尽力を賜りますとともに、今後ますますの御活躍を御期待申し上げた

いと思います。

本日は、お忙しいところ本当にありがとうございました。(拍手)

次に、日程2、現地調査実施報告書（5月実施分）についてであります。本年5月27日、30日に実施いたしました現地調査の実施報告書案につきましては、あらかじめ各委員にタブレットで配信しておりますが、その概要について事務局から説明させます。

○柳原議事調査課総括課長 それでは、現地調査実施報告書案の概要について御説明申し上げます。

表紙をおめくりいただきまして、2ページをごらん願います。本年5月27日と30日に行われました現地調査は、東日本大震災津波の被災地における復興や被災者支援の取り組みの状況等を調査し、今後の復興に係る審査に資することを目的として実施したものでございます。

調査は、4班体制により、野田村と洋野町、宮古市、大槌町と山田町、大船渡市において実施いたしました。

今回は、午前中には企業や団体の取り組み状況の視察と意見交換を、午後には商工関係団体を対象に、被災地経済にかかわる現状と課題について、各団体の長等と意見交換を行いました。

それでは、3ページ、別添1をごらん願います。以下のページにつきましては、調査の行程及び出席委員を取りまとめたものでございます。

続きまして、9ページの別添の2をごらん願います。以下のページにつきましては、調査の際にそれぞれ調査先から寄せられた県への要望事項に対する県担当部局の対応状況などを取りまとめたものでございます。

17ページの別添3をごらん願います。以下のページにつきましては、各調査先における調査概要であり、質疑や意見交換等の要旨を取りまとめたものでございます。

少し飛びまして、49ページ、別添4をごらん願います。以下のページにつきましては、調査先からいただいた説明資料を添付しております。

大きく飛びまして、149ページ、別添5をごらん願います。以下のページにつきましては、調査の実施状況の写真等を添付しております。

説明は以上でございます。

○岩崎友一委員長 ただいま事務局から説明させましたが、委員の皆様から今回の現地調査の実施報告書案に関しまして御意見等はございますでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○岩崎友一委員長 それでは、事務局説明のとおり取りまとめることとし、また調査先に送付をしたいと思います。これに御異議はございませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○岩崎友一委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

なお、文言の整理等については、当職に御一任願います。

次に、日程 3、その他であります、皆様から何かございますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○岩崎友一委員長 なければ、以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。

本日はこれをもって散会いたします。